Heroldo de HEL

N-ro42　aprilo-majo, 1992

ORGANO DE
HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

北海道エスペラント連盟

001 札幌市北区北３５条西９丁目３－１
エステート２０３　カワハラ方
電　話　０１１－７５７－３４６６

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO
Hokkaidô, Sapporo-si, Kita-ku,
Kita 35 - Nisi 9, 3-1-203
KAWAHARA kata, J-001 Japanio

われわれは遠くから来た，
そして，われわれは遠くまで行くのだ

北海道エスペラント連盟創立６０周年記念
第５６回北海道エスペラント大会

１９９２年9月１２日（土）／１３日（日），　札幌市中央区大通西12丁目　高教組センター

１９３２年8月、第１回北海道エスペラント大会で高らかに緑星旗をうちたてた北海道エスペラント連盟は今夏、創立６０周年をむかえる。

６０年の歳月はむろん平坦なものではなかった。しかし、われわれの諸先輩はその歳月のなかで、いっときもその旗をおろすことはなかった。

いま、連盟創立６０周年の記念すべき瞬間をむかえるにあたり、われわれは先人の理想と情熱と献身を、そして先人が遠くからあるいてきた道を想起し、緑星旗を高くかかげて、その仕事を遠くまでひきついでいこうではないか。

全地方会とエスペランチストは、実用と普及のふたつの活動をいっそう旺盛にすすめよう。

連盟創立６０周年祝賀の大会に全道すべての地方会、エスペランチストが呼応しよう。

大会成功にむけて怒涛の進撃を開始しよう！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事務局の電話番号変更

題字右の電話番号です。お間違えないように。

LA UNUA DE APRILO

Okaze de la beninda tago
Gratulas, bondeziras kaj
Sendas kvardek tri kisojn
Al *Vi* trans la markolo
la ĝ.s.

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

★★★本号主要目次★★★

第56回北海道大会の日程・会場きまる・・・・1
浜益中学校の『緑の旗の下に』　藁谷知栄子・2
Ni ĝuis bonvenigan vesperon por kara amiko
YAMAGISI Etuko・・3
読書ノートから　須藤昭三・・・・・・・・・4
研究と討論・北海道のエスペラント表記・・・5
北海道合宿から全国合宿へのメッセージ・・・9
IRUMADO EN LA OAZAJ TAGOJ　KAWAHARA K　・・10
事務局だより／日本大会（松島）へ！・・・・12

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

── 浜益中学校学校祭（91年秋）の『緑の星の下に』の上演成功！ ──

昨年10月19／20の両日開催された石狩管内浜益村立浜益中学校学校祭で２年生が岡一太・作の演劇『緑の星の下に』を上演した。上演にさきだち、同校の藁谷知栄子教諭から札幌エスペラント会の宮岸忠孝さんに緑星旗、La Espero についての照会がありました（n-ro 41 既報）。

浜益中学校の２年生はりっぱに上演を成功させました。つぎの文章は藁谷先生から宮岸さんにあてられた手紙です。このとりくみのなかで、こどもたちの心とザメンホフの心がふれあいました。それがいつの日か花ひらくことに期待しましょう。

たいへんおそくなりましたが、藁谷先生と宮岸さんへの感謝のきもちをこめて紹介いたします。

（見出しは編集部）

いつまでも　胸に残る　あの歌ごえ

浜益村立浜益中学校教諭　　藁谷知栄子

前略

お返事を書くのが大変遅くなり申しわけありませんでした。研修等も一段落し、やっとひと息ついているところです。

浜益もついに寒い冬が到来し、この地での初めての冬に不安でいっぱいです。荒れる海と横なぐりの雪はこれからますます厳しくなりそうです。

さて、学校祭での「緑の星の下に」という演劇は、やはり内容が濃いだけに、子どもたち全員がそれについて理解し、演技につなげていくことは、大変難しいものでした。しかし、何度も練習をしていくうちに、子どもたちの目が、声が、変化していくのがわかりました。

主役のレオニイ役をやった生徒は、本番のラストシーンで、厳しく光った瞳でドイツ兵をにらみつけ、セリフも自分自身ではなく誇りを持ったポーランドの少年になりきっていました。彼の歌声はラストを盛り上げました。また老人役の生徒も（女の子が演じました）説得力のあるしゃべり方と、心の中に生き続けているエスペラントへの思いをうまく演技にもりこんで、キラリと光っていました。他の役者たちも、それぞれに真剣な表情で演技をしていました。最優秀賞は取れなかったものの、私はこの脚本を選んだ子どもたちにとって、今回の演劇はより深い学習のひとつとなったのだと強く感じました。

それを感じたのはつい最近のこと、国語の授業中のことです。「平和への願い」という単元の中で『ベンチ』という物語を学習しました。「緑の星の下に」のおかげで、子どもたちが驚くほどすんなりと、人間の自由、平等、平和について理解を深めていくことができたのです。そういうことに真剣に耳を傾けることができ、考えることができるようになったのです。これはすばらしいことだと感じます。

今回の主役たちは２年生です。１年生から３年生まで、各学年１クラスづつ、全校生徒84名しかいない学校です。他の学年の子どもたちには今回の演劇の内容はとても難しいものでした。劇の前半部分は理解するのに苦労していた様子でしたが、後半の役者たちの盛り上がりによって、エスペラントがどういうものであるか、わかったようでした。

次にまた、私がどこかの学校でこの脚本に取り組むことがあれば、その時はもうすこし勉強をして、エスペラントについての理解を子どもたちに

しっかりと学習させていきたい……と感じました。

子どもたちの胸には、あの歌声がきっといつまでも残っていくことだろうと思います。テープを送って下さって本当に感謝しています（子どもたちは、すぐに覚えたのですよ）。

私は今年〔91年〕の春、教育大を卒業し、新任教師として釧路から遠い浜益にやって来たばかりです。まだ担任は持っていませんが、副担任として2年生の学級を支えてか、支えられてか、とにかく頑張っているところです。毎日が期待と不安でいっぱいですが、子どもたちのために努力していきたいと思っています。

今回の学校祭、演劇が成功したのも宮岸さんのご協力のおかげです。本当にありがとうございました。 ■

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宮岸さんのお話では、藁谷先生に送られたのは La Espero のカセットテープ（エスペラント・日本語）と緑星旗のほかエスペラントについての資料ということでした。

藁谷先生、浜益中学校の現3年生のみなさん、『緑の星の下に』のこと、エスペラントのこと、La Espero の歌、わすれずにいてくださいね。

<u>演劇『緑の星のもとに』のあらすじ</u>

ナチ占領下のワルシャワ。教会にかくれた戦争孤児の少年少女が反ナチのある計画をこっそりと相談している。そこへ神父が一人の老エスペランチストをつれてくる。その老人とこどもたちがエスペラントについて語りあっているとき、レオニイ少年が計画を実行しようとひとり夜の街にぬけでてゆく。レオニイを追ってドイツ兵が教会の門をたたく。連行、銃殺か…。しかしそのドイツ兵の胸に…。

Ni ĝuis bonvenigan vesperon por kara amiko

YAMAGISI Etuko (Sapporo)

En la 2-a de novembro lastajare okaze de la sabat-kunsido ni bonvenigis s-ron NISISATO Sizuhiko kaj babiladis kun li, kiu estis ano de Sappora Esperanto-Societo antaŭe kaj ĝustatempe vizitis sian naskiĝurbon Sapporo el Kanado.

Ni ĉ 12 SES-anoj kanataj aŭ nekonataj por li pasigis ĝojan tempon, rigardante karmemorajn fotojn, aŭdante de li nuntempan situacion en Kanado. Por ni kune ĝuintaj tiaman esperantistan vivon, ne troviĝis tempospaco kaj ankaŭ tian etoson simpatie ĝuis novaj kamaradoj, tiel mi kredas. Vere estis gaja tempo.

S-ro Nisisato nun loĝas en Toronto. Li laboras kiel profesoro en la Universitato de Toronto k.a. Sed tamen antaŭ ĉirkaŭ tridek jaroj li studis la psikologion en Hokkajda Universitato. Tiam jam li estis lerta esperantisto. Por mi li kaj s-ino NAGATA Akiko estis tre bonaj gvidantoj en tiama ĵaŭda kunsido de SES. Se mi ekzercus min en esperanto daŭre de tiam, nun en Sapporo troviĝas ankoraŭ unu lerta esperantistino, do, estas bedaŭrinde.

Post la kunsido ni ŝanĝis sidlokon kaj gustumis bongustan nabejakon ankaŭ karmemoran por li. Tiam s-ro KODAMA Hiroo, prezidanto de SES, sopire kaj emocie rakontis pri lia lerteco de esperanto.

"Kiam s-ro Tibor Sekelj prelegis iam en Sapporo, vi tre bone interpretis, ĉu ne?"

Malnovaj kamaradoj kapjesis kun elkora konsento. ■

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Nabejajo : stufita udono kun diversaj ingredientoj en tervazo, kiu varmigas stomakon kaj koron (R)

読書ノートから

須藤　昭三

La Blinda Birdo　István Nemere 著
（ハンガリー，1983年刊，118p．1600円）

ネメレの作品も６冊目になると多少は読み慣れてくる。しかし随分としつこさを感じるのは私だけだろうか、あまりしつこいので私は最後の部分を先に読んだほどである。物語が面白くなってくるまで時間がかかるので、大抵の読者は途中で投げ出してしまうかも知れない。二つの出来事を交互に同時進行させる手法も、小間切れの時間を割いて読み進める読者には混乱の原因となるが、しかしこれも慣れだろう。

物語は－－国際作家会議がヨーロッパのある都市スカンジオで開催される、その会議に初めて招待された誇り高きスベン・ビボルグは37歳ですでに５冊の作品をもつ作家だった。第１日の分科会で日本代表が長々とある問題を論議していたが、ｒとｌの発音を混同していて何も分からなかった、などと日本人のことが時々かかれていて苦笑する。

第２日目に壇上に上がったのが南共和国から偽造パスポートで会議に参加した黒人作家Govan Dyebo だ。彼は南共和国の独裁について報告するためにやってきたのだった。黒人は二人以上の黒人と同時に話す権利はない、人口調査に黒人人口を算入しない、人口調査とは人間に関するものだからだという、などと公然と告発してゆく。あることからビボルグが彼と近づきになる。独裁国家にすれば、この黒人作家の行為は内部告発で重大な犯罪である。にもかかわらず彼は帰国して逮捕される。

ビボルグはこの友人の消息を探り、救出するために同僚の忠告も振り切って、南共和国のプレトビーレに出かける。そしてその町の作家二人に援助をもとめるが断られる。

－－ここでは知識人が外国人と接触し始めたら、その事実について後で報告する義務があるのです。何時、誰と、どんな目的で．．

－－外国人といえど当局に目をつけられたらどうなると思います？　貴方がホテルで寝ている間に、シャワーを使っている間に、パスポートを“彼等の代理人”（どこにでもいるのですよ）に盗まれたらどうなりますか？貴方はもう外国人ではないのです。ある日ナンバープレートのない車の下になっているかも知れません。突然ホテルの屋上へ警官に連行され、反抗した理由でピストルで撃たれるかも知れません．．

弁護士のところに相談に行くと、Dyebo は三倍の裏切り者だという。まず国を離れたこと、次に偽造パスポートを使ったこと、そして南共和国を非難したこと。弁護士はビボルグに、悪いことは言いません、早くお国に帰って著作に専念なさいとすすめる。検察官のところに行ったら、すぐ大使館に知らされ領事から呼び出しを食う、他国の政治に干渉してはいけないと。

しかし、この国にも黒人たちの解放運動組織“フロント”＝アフリカ解放戦線があった。金で決定権者を買収してみるという。半信半疑だったが金を出した。警察から飛行機のリザーブまで用意され、帰国しなければ後は保証しないとまで言われながら、彼は解放戦線に参加して刑務所からの移送途中のゴバンを奪還するが、この黒人作家は刑務所内での拷問のために両足切断を必要とする病気にかかっていた。国境へ向かって進む彼らに独裁国の警備隊が迫ってくる．．．どうなるか．．

あとは読んでください。

研究と討論　北海道エスペラント大会と北海道のエスペラント表記をめぐって

編集部から

一昨年の北海道エスペラント大会で、本誌上での研究・討論に付された表題の件について、編集部はこれまでに寄せられた意見のすべてを掲載してきた（第38号に木村喜壬治、星田淳、佐々木将人の、第39号にカワハラ・カズヤの寄稿を掲載）。しかし、当初の予想に反して、寄稿の数はすくなかった。

今号でさらに星田、佐々木、カワハラの再論を掲載するが、２度にわたる大会で会員の研究課題とされたテーマであるにもかかわらず、寄稿者４名（のべ７編）という結果は、北海道のエスペランチストの主要な関心がここにはない、ということをしめしている。

寄稿は到着順に原文のママ発表した。この「研究と討論」では編集部はいっさい「交通整理」をしていない。そのため論点がかみあわない場合もみられるかもしれない。この論戦を読んで、なにを得るかは読者にゆだねられているが、ここでの研究内容が現在の北海道のエスペランチストの個々の理論水準を反映しているてんを念頭において読まれることを期待する。

このページへの投稿には締切りをもうけない。遠慮せずに意見を寄せていただきたい。　（編）

＊＊＊

北海道のエスペラント表記・私見
星田　淳　（苫小牧）

前号（N-ro39,p12）の hokkajdo , hokajdo の発音について。

「北海道」の三文字の日本語読みをローマ字で書くと hoku-kai-dou になります。ところが本来漢字は一字一字が一音節文字（一母音をもつ）という特徴があるので「北」の発音は本来 hoku ではなくて、hok だったようです。これはこの字を朝鮮では bug、ベトナムでは bakと表記していることからも推定できます。「海道」は各々二母音のように見えますが、二重母音は一音節として、（エスペラントの kaj, dou のように）発音されるから、これでよい。

「道」の実際の発音は doo（ドー）ですから、「北海道」の現実の発音はどうなっているかと考えると、漢字の発音を丁寧に教える場合は別として、「ホクカイドー」は聞く事ないですね。普通の会話のなかでは上に述べた漢字の発音法則（一字一音節）が働きだして hok-kaj-dooになり、さらに k-kの所は２度同じ破裂音を繰り返す努力を省くために、初めの kではこの音の発音寸前の形で息を止め（声門閉鎖）、つぎの kではその止められた息を破裂させる、いわゆる促音化（朝鮮語では濃音化）が起こります。この結果として、我々がいつも聞いている「ホッカイドー」になるわけです。日本語のローマ字表現も、（訓令式、ヘボン式共に）このやり方ですね。

上に説明したように hokkajdo は原語の構造に深く関わっており、アクセントも一致しています。hok-kaj-doと発音されればもとの漢字発音に近いでしょうし、 kk を促音とすると日本語の普通の発音に近い。どちらにしても、誤解の起こることは少いでしょう。

hokajdo の発音は「ホカイド」で、原音からは離れてきます。この点相沢さんの意見は尤もと、私は思います。

上に k-kと読まれても、kkを促音化してもいいように書きましたが、この点疑問がない訳ではありません。私は Lingvaj Respondojの§71（Pri Prononco en Teorio kaj en Praktiko）にあるザメンホフの意見によればこの程度のことは問題にならないと思いますが、どうでしょうか。（まだ読んでない方のために以下原文を示します）

71　PRI PRONONCO
EN TEORIO KAJ EN PRAKTIKO

Kiel en ĉiuj lingvoj, tiel ankaŭ en Esperanto la sono "j" ordinare moligas la konsonanton, kiu staras

antaŭ ĝi; oni sekve ne devas miri, ke ekzemple en la vorto "panjo" la plejmulto de la Esperantistoj elparolas la "nj" kiel unu el molan sonon (simile al la franca "gn"). Tiel same oni ne miru, ke en praktiko oni ordinare antaŭ "g" aŭ "k" elparolas la sonon "n" naze, aŭ ke antaŭ vokalo oni elparolas la "i" ordinare kiel "ij". *Batali* kontraŭ tia natura emo en la elparolado ŝajnas al mi afero tute sencela kaj senbezona, ĉar tia elparolado (kiu estas iom pli eleganta, ol la elparolado pure teoria) donas nenian malkompreniĝon aŭ praktikan maloportunaĵon; sed *rekomendi* tian elparoladon (aŭ nomi ĝin "la sole ĝusta") ni ankaŭ ne devas, ĉar laŭ la teoria vidpunkto (kiu en Esperanto ofte povas esti ne severe observata, sed neniam povas esti rigardata kiel "erara") ni devas elparoli ĉiun sonon severe aparte; sekve se ni deziras paroli severe regule, ni devas elparoli "pan-jo" "san-go", "mi-a".

Respondo 56, *Oficiala Gazeto*, IV, 1911, p.222

要約すれば：発音の原則は「すべての音を一つ一つ正確に発音する」ことだが、発音しやすく誤解されないなら、僅かばかりの発音の「揺れ」に目くじらを立てることもあるまい――ということでしょうか。

この同じ本のなかで Zamenhof は固有名詞のエスペラント化について述べています。§63ですが、これも以下に原文を。

63 PRI LA ORTOGRAFIO DE PROPRAJ NOMOJ

Propran nomon oni *nun* skribi tiel, kiel ĝi estas skribita en la gepatra lingvo de ĝia posedanto, ĉar en la nuna tempo la fonetika skribado de multaj nomoj kaŭzus tro grandan kripliĝon de tiuj nomoj kaj diversajn malkomprenaĵojn. Sed tio ĉi estas nur rimedo *provizora*; ni devas celadi al tio, ke pli aŭ malpli frue en la lingvo internacia ĉiuj nomoj estu skribataj laŭ la fonetiko internacia de tiu ĉi lingvo, por ke ĉiuj nacioj povu legi ĝuste tiujn nomojn. Tial ĉiuj personoj, kiuj ne timas tro kripligi aŭ nerekonebligi sian nomon per skribado fonetika, povas jam nun skribi en Esperanto sian nomon laŭ maniero esperanta. Jen estas la kaŭzo, kial mi skribas mian nomon per Z, kvankam ĝi havas devenon germanan.

Al la Berlinaj Esperantistoj, "Esperantistische Mitteilungen", Junio, 1904

もともと Samenhof だった自分の名を発音通り Zamenhof にしたことが出ていますね。ここでは人名について書いているようですが、地名についても当然「将来エスペラント化」の展望を持つべきでしょう。

やっぱり反論してしまうぞ、という話

佐々木将人　（函館）

1　やっぱり誤解を受けてしまったぞ、という話

文章力の無さが話を混乱させているぞと38号及び39号を見て反省している私であります。どう書けばいいのかな。

いい加減1990年大会の議論を覚えている人は少なくなったのかも知れませんが、そこの議論で特徴的だったのは、大会の性格と大会のエスペラント語表記が密接に関係しており、この名称であればこういう性格付けがなされる、よって「賛成」もしくは「反対」という議論がまるで与えられたもののようになされていたことです。

でもそれって正しいことでしょうか、なにか違うんじゃないかと思って、敢えて極端な議論を提示したのです。実はその考えは今も変わっていません。私自身は、北海道エスペラント大会は、北海道エスペラント連盟の向こう１年間の活動方針を決める「議会」であり、同時にエスペラント語を話せる人のための「お祭り」であると考えています。しかし、私が北海道エスペラント大会の性

格をどう考えようとも、そのエスペラント語表記は別個に考えるべきだと思うのです。もちろん日本語をエスペラント語訳する時に、日本語の意味を深く追求するのは正確な翻訳のためには必要ですが、大会の性格付けの結果がエスペラント語に全て反映すると考えるのは間違いです。大会の性格付けと大会名称のエスペラント語訳の問題は別個になされるべきであり、固有名詞の形容詞化の問題と同様、語学的問題なのです。そして必要なのは日本各地で開かれる同様の大会においてどのようなエスペラント語表記がなされているかの調査なのです。

もし、大会名称を真剣に議論するのであれば、こういう討論の基礎となるべき基本資料の上にたって議論しなければいけないと思うのです。私はまさに議論のやり方に問題があると指摘したかったのです。

2　これで議論のやり方と問題の整理はなされたぞ、という話

日本各地の例は私が言わなくとも然るべき方が適切な発言をしていただけるものでしょうから、いよいよ「北海道」の形容詞化の問題を論じます。

結論から言うと今は［Hokkajda］でもいいかなという気がしています。ただ私はこの形を使ったことがないんですよね。

カワハラさんはかなり謙遜されているので、非常にやりにくいのですが、（おそらく本人は知っていて、敢えてあのように言われたというのが見え見えなんだよなあ）エスペラント語も言語である以上、「現実に通用し、理解されているエスペラントをできるだけ尊重するしかありません。」。だからこそ現実に通用し、理解されているエスペラント語とは何かを把握しなければなりません。当然それは個人の感性や主観によって左右されてはいけないものです。これを認めると各人が「これがエスペラント語です。」と言って収拾がつかなくなってしまいます。何がエスペラント語かを把握するのは大変な作業ですが、だからといって止めるわけにはいきません。少なくとも「私はこう思っていた」というだけでは説得力がありませんしエスペランチストを説得するための研究はどうしても必要なのです。しかもエスペラント語においては例の16条の文法は変えてはならないものとされているではありませんか。研究は全く必要ではないとするのは、非常に危険です。

そこで固有名詞を形容詞化するときの問題ですが、固有名詞の語尾の母音を変えればそれで済むわけではありません。そういうエスペラント語の規則は存在しないのです。札幌は名詞、旭川は形容詞、函館は副詞、苫小牧は動詞なんて話がありますか。全部名詞なのです。そして名詞を形容詞化するときには、語尾を付ける方法と、語尾を変える方法があり、その違いは語幹をどこまでと見るかによります。固有名詞は全てを語幹と見るべきでしょう。そして例外的によく使われるがため、あたかも普通名詞のように、語尾を変化させる方法が定着しているかどうかを判断しなければなりません。「hokkajda」はもう定着していますか、という問題なのです。

3　相沢さんごめんなさい、という話

38号に掲載された相沢〔治雄――編集部注〕さんの旧稿を読んで、「参った。」と思いました。jの使用にも相当の根拠があったのですね。

これは私の独断かも知れませんが、相沢さんはjの使用に相当悩んだと思います。発音は確かに似ていますが、「い」が母音なのに対し、jは子音です。

4　最後に

再び過激な意見を書いてしまいましたが、反論をお待ちしております。

5　追伸

でも「hokkajdano」とは言いそうな気がする。

Lingvaj Respondoj de Ludoviko

L.L.Zamenhof著，G.Waringhien編．

141p．，1990年，Eldonejo Ludovikito（京都）刊．第7版．語法へのさまざまな疑問にザメンホフ自らが示した回答集．2000円．注文は書店をつうじてＪＥＩへ．

ふたたびホッカイドーのオトについて

カワハラ・カズヤ　（札幌）

編集部のワープロ担当というしごとがら、星田さん、佐々木さんの原稿を読者より早く拝見することができました。ほんらいなら一般会員とおなじように、次の号で再論すべきところですが、この研究と討論に関連する意見をできるだけ多く発表して、会員の判断をまちたいこと、おふたりとも第39号のわたしの意見に言及されていることが、今号でわたしが登場する理由となりました。そのてんを、はじめにおことわりしておきます。

今回は“hokajdo の発音は「ホカイド」で、原音からは離れてきます”ということについて、わたしの意見をのべます。Hokajdo のオトが原音からそれほどはなれているとはおもえません。エスペラントとしてのそれぞれコトバをカナモジにかきうつしたとき、Hokajdo が“ホカイド”になるなら、Hokkajdoは“ホクカイド”でしょうし、Hokkaidoは“ホクカイード”となり、いずれも“ホッカイドー”からはなれます。原音を正確にあらわす方法を選択するなら、訓令式ローマ字をそのままエスペラントに採用して Hokkaidô と長音記号をつけることです。これなら“ホッカイドー”になります。わたしは郵便物にかんしてはこのローマ字方式を採用しています。

地名をエスペラント化するときには原音からのずれが生じます。 Hokkajdo も Hokajdoも事情は同じです。この例よりもっと原音からはなれた例をわたしたちはひんぱんにつかっています。Tokio であり Kiotoです。これらの表記はエスペラント外の言語に由来するかもしれませんが、すでにエスペラント化され国際的に通用しています。Hokkajdoについても、諸先学はその表記を採用し、ながく世界に発信してきたのですから、「国際化」をじゅうぶんに意識していたのだとおもいます。ちなみに、この Heroldo de HEL は第28号（89年01月）から、発行者を Hokkajda Esperanto-Ligo と表示し、第33号（89年 11/12月）から所在地も訓令式ローマ字・日本式語順でかくようにあらためました。また前号からは所在地に Hokkaidô をつけくわえました。いまのところまったく不都合はありません。佐々木さんは“「Hokkajda」はもう定着していますか”とおっしゃいますが、すくなくとも連盟の公式機関誌のその表記に疑問も意見もよせられていません。すでに定着しているとかんがえるのは早計でしょうか。なお、 Parolas Hokkajdo を外国に発送するさいもとうぜん表記を統一しています。

Plena Ilustrita Vortaro (PIV) が Hokajdoのかたちを採用したのは、まず Hokkajdo があってそれをよりいっそう明確にエスペラント化して見出し語にしたはずです。PIV の編者にしてみれば“KK”がこのばあい不自然とかかんがえたと推定できます。 Hokkajdo がホッカイドーのこととしっている人をのぞけば、Hok-kajdo と、もともとの合成語として発音するのがふつうです。エスペラントには促音がないのですから当然です。それは、わたしたちが、ekkoleri, ekkoni, ekkrii, ekkuri, malamikoなどを発音するときとおなじ心理からです。わたしが第39号で“Hokajdo は Hokkajdoよりオトにかぎっていえば合理的な表記です”とかいたのはその意味でです。

わたしは、将来的には Hokajdoのかたちが、一般化していくだろうとかんがえています。しかし現在は Hokkajdo のほうが通用しているのをみとめています。ホッカイドーは世界のなかではちっぽけな島でしかありません。ホッカイドーのエスペランチストが国際的エスペラント運動に貢献する仕事をするとき、ホッカイドーから発信される手紙、文書が世界中をとびまわるとき、Hokkajdo ないし Hokajdoが本当の意味で国際的に通用するときなのだとおもっています。

さいごに佐々木さんにおねがいします。どうか“過激な意見”などとおかきにならないでください。小心で、平々凡々の生活に安住することだけをのぞんでいるふつうのおじさんは、その文字をみるだけで身ぶるいし、いまも指をふるえさせながらワープロをうっているしまつなのです。 ■

９２北海道合宿実行委員会から第２５回全国合宿（埼玉県入間市）にあてたメッセージ

Mesaĝo

de Plenumkomitato de Hokajda Esperanta Kunloĝado
al La 25-a Tutlanda Kunloĝado de Esperantistoj,
Iruma, 02-05/majo, 1992

Sapporo, la 2-an de majo,1992

Karaj amikoj,

Okaze de la prospera malfermiĝo de la 25-a Tutlanda Kunloĝado mi elkore salutas vin en la nomo de la plenumkomitato de Hokajda Kunloĝado, okazanta en Sapporo paralele kun la via.

Ekde la jaro 1986 ni, hokajdaj esperantistoj rehavas nian kunloĝadon en la plej norda insulo de japanaj insuloj, kie nur en la komenco de majo ekfloras sakuro kaj aliaj samtempe kaj pompe. En la venteto de prokrastita printempo ni kunvenas, kvazaŭ ursoj post la vintrodormado. Dank' al la amika prizorgo de la organizantaro de la Tutlanda Kunloĝado, lastajn du jarojn la nia ĝuis riĉajn lecionojn de eminentaj gvidantoj, kiuj kutime gvidas la vian: nome Krizantemo kaj Konisi gaku. Ankaŭ ĉi-jare Hokajda Kunloĝado ĝuas la klerigon de Krizantemo. Pro tiu malavara aranĝo mi tutkore dankas la organizantaron de la via.

Ŝi kuraĝigis kunloĝadantojn antaŭ du jaroj per jenaj vortoj: "Hokajdaj samideanoj estu pli praktikemaj en nia lingvo". Antaŭ ĉirkaŭ cent jaroj usona d-ro William Clerk restigis al junuloj en Hokajdo famekonatan frazon: "Knaboj estu ambiciaj". Poste oni starigis statuon de la doktoro por memorigi lian kontribuon, sur kiu estas nuna evoluo de nia regiono. Ankoraŭ ne staras en nia insulo statuo de Krizantemo, sed ni, hokajdanoj neniam forgesos ŝian kontribuon al la movado en Hokajdo.

Se temas pri skaloj de ambaŭ kunloĝadoj en Iruma kaj Sapporo, nia kunvenantaro estas malpli ol Iruma. Dum en Iruma pli ol cent da spertaj esperantistoj svarmas, en Sapporo kolektiĝas ĉirkaŭ dudek ŝafaj esperantistoj inkluzive de duonesperantistoj. Klaras la diferenco en cifero. Sed vi sciu, ke en nia insulo havas kvin milionoj kaj sepcent mil da loĝantoj, dum en la tutlando loĝas cent dudek milionoj da homoj. Tio montras, ke nia kunloĝado sufiĉe grandas ol la via proporcie de la loĝantaro. Mi emas pri tio pretendi en la koro, sed sen konfeso.

Somere de ĉi tiu jaro ni festos la 60-an datrevenon de fondiĝo de Hokkajda Esperanto-Ligo. Kiel posteuloj, ni ĉiam alte tenas la standardon kun verda stelo en la vasta ĉielo de Hokajdo. Nia koro ardas, kiam ni havas la renkontiĝon por samideanoj, konsistantaj el pluraj generacioj. Kaj nia koro nun estas en Iruma, eĉ se geografie inter ni kuŝas la markolo Tugaru kaj krutaj montoj. Konsiderante ke en ĉi tiu momento nur du kunloĝadoj esperantistaj okazas en la insuloj, ni sentas vian kunloĝadon frata. Por esprimi nian dankon al la organizantaro kaj tiun fratan senton al vi, ĉiuj karaj amikoj la plenumkomitato de hokajda kunloĝado sendis al Iruma unu el ĝiaj membroj kune kun ĉi tiu mesaĝo. Mi tamen iom timas, ĉu tiu kanajlo ne ĝenos vin. Sed mi bone konas vian indulgemon kaj lian inklinon ne formanĝi homojn. Do, paciencu!

Vivu nia kara lingvo! Vivu ambaŭ kunloĝadoj! Vivu amikeco inter ni!

Kun kisoj,

BABA Emiko

Prezidanto de la Plenumkomitato de Hokajda Esperanta Kunloĝado en 1992

IRUMADO EN LA OAZAJ TAGOJ

KAWAHARA Kazuya (Sapporo)

Nemalmultaj kunloĝadantoj de ĉi-jara Hokajda Kunloĝado, okazigintа en la oazaj tagoj en la intertempo de severaj labortagoj, miris, almenaŭ rimarkis mian maleston al la maja renkontiĝo, ĉar mi neniam malpartoprenis ĝin, de kiam ĝi reviviĝis en 1986. Kaj ili samtempe eksciis, ke mi estas en Iruma, kie alia esperantista kunloĝado okazas. Certe mi irumadis la saman periodon (precize dirite, unu tagon longe ol la hokajda). Vi, karaj legantoj, kiuj kutimas pacience akompani esperantajn paĝojn de nia Heroldo, vidos malsupre "raporton", sed tute individuan, pri la irumado.

*

Mi aliĝis frue al ĝi, sed ne antaŭmendis aviadilan bileton iroreiran inter Titose kaj Tokio. Kiel vi ofte spertas, dum la ora semajno estas malfacile akiri la bileton pro "nacia migrado". Mi malsukcesis enmanigi la platenaĵon kaj apenaŭ akiris bileton kun rezervitaj seĝoj de fervojo. Akurate je la deka vespere de Majtago mi ekveturis de Sapporo per tranokta trajno.

La finstacio de la trajno estis Aomori, kie mi devis ŝanĝi trajnon al Morioka, kie mi denove devis ŝanĝi trajnon al fincelo. Iom embarasa veturado. Sed tio ne tedis min. Dum la surrela tempo mi povis dormeti kaj refreŝigi min, gapante la pejzaĵon, kiun eventuale neniam mi revidos en la vivo. Ankaŭ legado estas plezuro sur reloj. En mia valizo estis metitaj esperantaj gazeto, libro, eĉ PIV. Ĉu vi ne opinias, ke mi estas bona samideano? Sed, la titolo de la libro estis "EL LA VIVO DE BERVALA SENTAŬGULO" de L. Beaucaire, ripete legata de mi. Karaj samideanoj, mi ne estas tiel rigida, kiel eble vi opinias.

*

Antaŭ la naŭa matene la sinkanseno haltis ĉe Sendai. Novaj pasaĝeroj eniris en la vagonon. Inter ili mi hazarde trovis samideaninon, kiun mi vidis kelkfoje en kongresejoj. Kaj hazarde ŝi okupis tuj nabaran seĝon de mi. Ni kun ĝojo ŝanĝis salutojn kaj miregis tiun hazardon. Alia hazardo plu okazis; ankaŭ ŝi veturis al Iruma.

Por tiuj hazardaj koincidoj mi proponis al ŝi toston kaj ŝi kompreneble konsentis. Mi elmetis el la valizo botelon de blanka vino kun marko Tokati. Tiam denove okazis nova hazardo, ke tiu vino estas ege ŝatata de ŝi. Beninda koincido! Mia koro kaj valizo momente malpeziĝis pro la ĝojiga hazardo. Ankaŭ malkorkilon mi serĉis, sed nenie. Mi ja forgesis envalizigi ĝin. Vidinte mian konfuzon, ŝi kun enigma rideto elmetis el sia mansako la ilon kaj eĉ du vinglasetojn. Kia neatendita preparo! Dank' al ŝia antauvida povo ni sendifekte tostis en la vagono, kvankam nadloj de la horloĝo ankoraŭ montris la naŭan matene.

Post la tosto ni babiladis, kiel samideanoj pri ĝeneralaj aferoj enkaj ekster esperantio. Ni povis vere senĝene interparolis, ne zorgante la orelojn de samvaganaroj, kiuj sendube ne komprenas nian lingvon, kaj dankante la jarcentan laboron de "nia diligenta kolegaro", kiu ankoraŭ ne sukcesas decide efikan vastigon de la lingvo.

*

Mi rimarkis, ke mi ankoraŭ ne prenas matenmanĝon kaj mia stomako postulas ion ŝveligan krom vino,

---

irumado = kunloĝado. "irumi" devenas de loknomo Iruma, kie oni okazigis/as/os valoran kunloĝadon de e-istoj ĉiumaje. La vorto aperos en la venonta eldono de Plena Ilustrita Vortaro. *rdIr*

do mi atendis preterpason de vagonara vendistino, kiu certe respondos stomakan bezonon de pasaĝeroj senmatenmanĝaj. Malfermis antaŭa pordo de la vagono kaj ekvidiĝis la vendistino kun puŝĉaro plena de portomanĝo k.a. Ĝuste tiam okazis ankoraŭfoje neatendita fenomeno. Ŝi malpakis malgrandan verdan tukpakaĵon kaj prezentis al mi manĝon. Vi, la paciencemaj legantoj ĉi-tie ripetite renkontas la adverbon ... "hazarde"! Ho, ŝi portis matenmanĝon hazarde por du personoj. Kaj obstine hazarde la varma manĝo konsistis tute el preferataj aĵoj de mi. Mi fiksis miam rigardon al ŝia vizaĝo, sur kiu aperas nur enigma rideto kun ĉarmo. Ni matenmanĝis post la dua tosto per la vino kaj mi bongustumis danke kaj kontentege la amoplenmanĝon de ŝi kuiritan.

*

Ĉi tiu "raporto" temas pri la irumado, sed mi ankoraŭ restas en la sinkanseno. Iruma ja malprksima!

Mi trovis en la manĝokeston pecetojn de sojsaŭce stufita amorfofalaĵo (ili tre bongustis). Tiam en mian kapon ideo etimologie klerigi ŝin. Mi demandis: "Samideanino, ĉu vi scias, ke la vorto amorfofalo estas tre signifoplena kaj estas kunmetita vorto el amor', fe' kaj fal'?" Jam komenciĝis en la vagono esperanta kurso antaŭ ol ni atingis la irumadejon. Ĉu vi ne opinias, ke ni estas bonaj gesamideanoj?

"Ne. Mi neniam legis, nek aŭdis tian eksplikon. Bonvolu, kara, daŭrigi vian klarigon pri...amorfofalo." Ŝi respondis pasive. Mi trovis ŝian vizaĵon ruĝiĝinta, kiam ŝi eldiris la vorton "amor'".

La serioza leciono kun granda frukto finiĝis, kiam la konduktoro anoncis ke ni jam atingis Tokion. Ni ĝisirumis sur la kajo de stacio de Tokio, ĉar mi havis antaŭdecidon en la urbo, kiun delonge mi kovris.

Tiumomente ni neniom antaŭvidis, ke nin sekvos novaj "hazardoj".

(daŭrigota)

DISTRA RUBRIKO POR ...
Ho, kia (mal)ĝojo!
Tiel (mal)kompetenta
HEL-libroservisto!
LA SENTAŬGA SERVISTO MEM

連盟図書部在庫紹介

在庫図書の一部（各1冊のみ）を紹介します。電話で注文ありしだい郵送いたします。

★Jen Iras Lazaro 40p.，著者不祥，Stafego, 85年，400円. Lazaroとはもちろんザメンホフのこと。プリヴァ、伊東三郎、いとうかんじの評伝とはちがった角度からのザメンホフ伝。エスペラントの父の人間味あふれる側面を照らしだすこの書は読む物の心をとらえてはなさないであろう。短いエピソード集なので入門テクストに最適。

★Kvaropo 28p.，Anne Ivarson著，Stafego, 発行年不明，300円. わずか4人だけの合宿。しかしエスペランチストは希望をうしなわない。小人数での合宿のありかただけでなく、これからのエスペラント合宿のゆくえを示唆するデンマーク女流作家の珠玉の一篇。合宿世話人必読書。

★EL LA VIVO DE BERVALA SENTAŬGULO 134p.，Louis Beaucaire 著，Stafeto, 74年，1700円. "UEA"の創立者のひとりである著者の自伝。エスペラント人口増加の方法、UEAの創立からSATへの名称変更、Dulingvismo とのたたかい、などなど12のエピソード。この1冊にエスペラント運動の歴史と課題が語りつくされている。

★TABUAJ VORTOJ EN ESPERANTO 32p.，H.Alos+K.Velkov共著，ブルガリア，91年，500円. もっとも新しいエス・エス辞典。収録語数は少ないが日常使用の必要語は網羅されているうえ、実用使用例もついている。PIV未収録の単語も多い。

エスペラントの早い上達は、学習の早期にこの辞書を利用することから。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

☎011-757-3466 北海道連盟図書部

★事務局だより★　　１９９２年０５月

連盟委員会（91年大会選出第１回）報告要旨

日時：92年02月16日（日）、14:55-17:40

場所：札幌市北区・北海道クリスチャンセンター

出席：阿部映子、馬場恵美子、星田淳、カワハラ・カズヤ、児玉広夫、渡辺晋道。（宮沢直人＝オブザーバー）。

欠席連絡：浜田国貞、須藤昭三、横畠君枝。（岩井正久委員には事務局の不手際で不連絡。事後に非礼をおわびした）

議　長：星田、　議事録作製：カワハラ

議題１．国際部設置の件。連盟の国際活動強化のため設置する（決定）。当面サハリン、シベリア地域との交流の可能性を追及する。部長空席のまま部員に宮沢直人（ＳＡＴ札幌グループ）を任命。

議題２．機関誌発行の件。部員病気休養による体制弱体化で Heroldoが発行できない。『ＨＥＬ通信』発行で当座をしのいだ。

議題３．北海道合宿の件。今年も５月連休に札幌で。講師に菊島和子を招請する。実行委員会の構成を決め、実行委員会に具体化を委任。

議題４．第56回北海道大会の件。日程を09月12・13日とし、会場（札幌市）の選定は事務局。　■

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

編集者からのおわびとおねがい

発行体制がみだれています。おわびします。

ずっと以前にいただいた原稿がやっと日の目をみるありさまです。現在、おくれをとりもどすべく複数号を同時編集中で、記事に若干の前後があるかもしれませんが、順次おてもとにおとどけいたします。しばしおまちください。

地域ニュース・情報、意見、「論文」、近況など、なんでも事務局までおくってください。こちらからもドシドシ依頼します。　　(Kk)

第79回日本エスペラント大会・松島

今年の日本大会は、おとなり東北――日本三景・松島で開催です。もう参加申し込みはおすみですか？　交通・宿泊の手配もお忘れなく。では北海道のみなさん、松島でお会いしましょう！

――９２年８月２９／３０日（土日）

会場・宿泊は宮城県松島町・ホテル大観荘。29日夜の夕食懇親会も同所で。東京は遠い、横浜は遠い、大阪は遠い…といっていたあなた、松島は遠いとはいわせません。東北はおとなりですっ！

【参　加　費】07/31まで 6,000円、08/01以降 7,000円。期限にかかわらず、障害者 3,000円、小学生・幼児 500円、中高生 3,000円、中高生以外の学生 4,000円、同伴家族 3,000円。

【不在参加費】　どうしてもその日は松島に行けないという方は不在参加してください。不在参加で申し込むと、実際には大会会場にいなくても心は大会に参加し、大会を支えることになります。参加者名簿に記載され、あとから大会報告書・記念品がおくられます。不在参加費は 3,000円。

【宿泊費】ホテル大観荘（一泊二食）。４人以上 1,7000円、 2-3人20,000円、１人38,000円。大観荘宿泊者は夕食懇親会(8,000円) の申し込み不要。大観荘以外にも割安な宿泊所もあります。

詳しくはエスペラント関係各誌の大会案内書をごらんになるか、下記の事務局へ電話を。

★　Heroldo de HEL
第４２号　(1992, aprilo-majo)
北海道エスペラント連盟機関誌
事務局：001 札幌市北区北35条西 9丁目 3-1-203　☎０１１－７５７－３４６６
郵便振替口座：小　樽　０－１７０７５
北海道エスペラント連盟